

8月28日に入った。長春から28日の午前0時過ぎに戻り、少々疲れたので今日はホテル周辺でゆったりと英気を養うこととした。4日間の行動を旅行記用にメモしたり、大連駅からすぐの天津街などを散策しながら久しぶりの街の顔を眺めた。

朝はゆっくり起床して9時ころホテルの向かい側にある「慶豊包子」というレストランでおかゆと包子を食べる。ホテルのレストランの朝食はバイキングでいろいろ取り揃えてあるが、朝からたくさん食べられるわけではないのでこの程度の胃に優しい食事で十分である。注文したおかゆは、「南瓜銀耳粥」といい、南瓜はカボチャで銀耳は白キクラゲである。これが結構いけるのだ。銀耳は東北地方に自生するキノコ類であるが、今は室内栽培が主力だとか。

本日で大連に来て5日目であるが、この4日間で何人もの友人と話す中で、ある話題を何度か耳にした。それは、星海広場のモニュメントについてであ



星海広場 (GoogleEarthから。画像取得2016年6月28日。このときは「華表」は星形の中心にまだあった)



上記写真の星形中央に立っていた大連華表 (2010年撮影。GooglePanoramioから)

る。大連の中心部から南西の海辺に広大な「星海広場」がある。1.1km²の広さであるが、東京ドームグラウンド85個分の広さと言えば分かりやすいであろうか。隣接して「星海公園」と紛らわしい名前の公園がある。このあたりは戦前日本が統治していた時代は「星が浦」という地名で、当時大連に住んでいた日本人は東洋一と言われた星が浦の海水浴場に家族で来て楽しんだところである。

ここで「星海広場」とはどのような広場かを紹介したい。

広場の完成は、1997年6月30日である。1997年と言えばすぐ思い出されるのは、香港が中国に返還された記念となる年である。広場を造るよう指示したのは、薄熙来大連市長(当時)であった。彼は大きな広場を造るため、一時ゴミ捨て場にもなっていた星海湾を埋め立てさせた。大連市の市制100周年記念事業としての位置づけであった。出来上がった広場はアジア最大の面積を誇った。広場の中ほどに二重の楕円形の道路を造ったが、一番外周の道路で長いところは240mもの長さがある。楕円の中は芝生が敷き詰められ花々が植えられていて気持ちが晴れ晴れする。そして楕円の中心には、天を突くような真っ白い「漢白玉華表」が立っている。「華表」は辞書によれば、〈古代、宮殿や陵墓の前に建てた装飾用の一対の大きな石柱〉と出ている。星海広場の華表の大きさは、高さ19.97m、柱の直径は1.997mもあり、上空から見ると星の柄に見えるそうだ。お分かりのように香港返還の年号に合わせて造られたのである。北京にも華表があるが、高さは9.75mであるという。造った当時こんなに大きなものを造って大丈夫なのか、と危惧する声もあったそうだ。

広場の周辺は、高層の高級マンションが林立して独特な景観を醸し出している。また楕円の端から海の間、巨大な本を開いたようなコンクリートのモニュメントがあり、そばには市制100周年を記

念した1000人の足型がはめ込まれた金属製のプロムナードが置かれている。とまあゴミ捨て場を一大観光地にした薄熙来市長(市長在任期間1993～99年)の手腕は素晴らしい。彼は大連の人からは絶大な人気がある。彼は大連市に多くの人を呼び寄せるためあちこちに芝生を植え、植栽を増やすなど街の美化に取り組んだが、この広場もその一環であろう。また経済開発区に多くの海外企業の誘致を図り経済も活性化させるなどした。最後は権力闘争の末なのか真相はよくわからないが、逮捕され服役中である。それでも大連人は奥さんを悪く言っても彼を悪く言う人はいない。

さて大連人の多く(?)が怒ったり悲しんだりしているのは、広場の象徴であり大連の誇りと言っても過言ではない「華表」を一方向的に撤去されたことである。(一方向的ではないかもしれないが中国では何かを実施するとき事前説明があまりなされないのでもこのように感じるであろう)しかも毎年ここで7月下旬から8月初めの約10日間開催される「国際ビール祭り」が終わった8月5日の未明に、後片付けの最中に取り壊され撤去されたそうである。これに対する大連人の多くの見方は、薄熙来が逮捕され、2013年に無期懲役の判決を受けたことに関連する北京の意向ではないかと噂している。私は大連の人ほどではないが、あの美しい華表がもう見られないのかと思うととても寂しい。

星海広場はいろいろなイベントが行われている。まず世界各国のビールが飲めるビール祭りは青島のビール祭りと共に有名であるが、あちこちに設営された舞台上では踊りや演奏などがうるさいほどに行われ大連人のエネルギー発散の場である。また5月には「大連国際徒歩大会」が何万人の規模で開催される。この広場を出発して美しい海岸通りを歩く。途中、北九州市と大連市の姉妹都市(1979年締結)を記念して造られ、両市の頭文字をとった「北大橋(1987年竣工)」という美しい吊り橋を通り、有名な観光地である「老虎灘」を目指して歩くのだ。大連にいた時毎年参加したが、個々人の体力に応じて5キロ、10キロ、20キロ、30キロと四つの距離に分けてある。私は20キロの部に参加し、友人



大連北大橋 (GooglePanoramioから)

と話をしながらゆっくりと歩くのであるが結構体力を消耗する。しかし無事ゴールして完走の承認印をもらおうと何とも言えない達成感を感じたものだ。花火大会と言えば日本では夏の風物詩であるが、中国では夏場と相場は決まっていない。お正月に星海広場で花火大会があるというので、ホテルがチャーターしたバスに乗り込んだ。広場の海側で打ち上げられたが寒さに震えながらの見物も今となれば懐かしい思い出である。このように大きなイベントの多くは星海広場で行われており、やはり大連の象徴となる場所である。華表が撤去された後はどうなるのかを友人に聞いたところ、音楽噴水を造るとのことである。

本稿の最後に「大連金州湾国際空港」について触れたい。現在の「大連周水子空港」は、もともと1905年に当時の日本海軍が建設したのがスタートで、利用客の増加と軍用空港として共用することになったこともあり拡張工事の連続であった。それでも現在は手狭になっていて、早晚需要が捌ききれなくなるという。そこで新空港の計画が持ち上がったわけである。当初の計画より3～4年ずれ込んだが、「中国光明網」は、2018年に完成見通しと伝えているようだ。新空港は、大連市北部の金州湾上に約21km²の人工島(タテ6.54km、幅3.5km)を造成し、その上に最終的に滑走路を4本造る計画である。アクセスは、地下鉄5号線と空港専用鉄道が乗り入れることになっている。当初の計画では現在の空港は貨物専用の位置づけであったが、果たして全体像はどのようになるのであろうか。私の家から成田空港は遠いので羽田↔大連便が開通することを願っている。

(続く)